

談話室

F. エンゲルスの生家を訪ねて

—若きエンゲルスの追想—

樋 浦 明 夫*

昨年(2003年)の5月から9月までドイツのマールブルク大学の解剖学・細胞生物学研究所に留学する機会があった。マールブルクはフランクフルトから列車ICで北へ1時間程のドイツのほぼ中央部に位置する小さな町である。南からチュウビンゲン、ハイデルベルク、マールブルク、ゲッチェンゲンは Universität Stadt 大学町と呼称される(図1)。グリム兄弟のヤコ



図1. ドイツ全図。主な都市名だけを載せた。グリム兄弟はヘッセン州ハーナウに1785、86年に出生。5、6才の時にシュタイナウ、次いでカッセルに移住。カッセルで童話を収集した。ハーナウからブレメンまでが通称メルヘン街道である。

プとウィルヘルムが1802-1806年にここで学んでいる。滞在期間が押し詰まってから週末を利用してドイツ国内を旅した。ぶらり旅に華をもたせることを思いつきフリードリヒ・エンゲルス(Friedrich Engels,

*徳島大学歯学部

1820-1895)の生家を訪ねた。エンゲルスは1820年11月28日、当時プロイセンのライン州バルメン Barmen に綿紡績工場の長男として生まれた(この年、4月に古代ギリシャ彫刻の一大傑作、ミロのヴィーナスが発見された)。日本では江戸時代末期から明治にかけての人物ということになる。エンゲルスが生まれた頃、隣のフランスでは大革命、ナポレオンの帝政時代を経た後の王政復古時代で、貴族が没落、退廃するのと対照的に商品の大量生産とその流通によって(資本主義化)資産を築いた新興市民階級(ブルジョアジー)が台頭した。こうした世相を背景に、バルザックは心を寄せる没落階級の貴婦人を利用して立身出世を図る若者の夢を「ゴリオ爺さん」、「谷間のゆり」などに描いた。この頃日本では工場制手工業が始まり、商人が経済的な力を持ち、諸藩の財政事情が悪化したことによる藩政改革が試みられた。また、諸外国が開国を求めて、日本の沿岸に出没し始めた時期である。当時の農民は副業だった糸紡ぎや、織物を生産していた(家内制手工業)が、社会的分業の発達につれて商人や富農の一部が農業から離脱した農民を一ヶ所に集め、同一の作業を分業で行わせるという工場制手工業(マニファクチュ)が封建社会の内部で資本主義的生産方法の萌芽的形態として出現した。こうした商品生産とその流通の発達は外圧としての諸外国からの開国要求とともに徳川封建社会をつきくずす一因となった。

エンゲルスは、近代自然科学にとってとくに豊かな実りをもたらしたものの一つとして、分析的で個々の点では正しい形而上学(ここでいう形而上学は近代科学の成果をもとにしているが、硬直し、固定的で相互の連関に欠ける学という意味。筆者注)に比べて、大まかな見方では正しかった2000年前の自然で単純な弁証法的思考のギリシャ哲学にくりかえし立ちもどらなければならない必要性を説いた(「反デュウリング論」)。過去を振り返ることが決して懐古趣味のそれではないという意味で、汲(く)めど尽きない宝庫である1500年前の時代と人々に思いを馳せながら若きエンゲルスを追想してみたい。エンゲルスに“ポルトガル語はたい

へん優美なことばで、またポルトガル人は、たいへん尊敬すべき国民だ”（妹マリーへの手紙、1840年8月20日）と言わしめたところのポルトガル人、モラエスは1854年にリスボンで生まれ、晩年の16年間で徳島で過ごし、エンゲルスと同じ享年75才だった。6月のある夜墓参りに出かけ家にもどり、玄関で南京錠の鍵穴が見えず戸を開けられずにいたら、手の近くに一匹の蛸が飛んできて、窮地を救ってくれたことに、おもわず“おヨネだろうか・・・コハルだろうか・・・”とつぶやく詩情豊かなモラエスだった。ポルトガルは20世紀初めに王政が廃止され、共和制に移行した。このことも王党派ではなかったが、絶えずポルトガルの政情に関心を寄せていた老モラエスが祖国に帰らず終生徳島で暮らした遠因だったとも考えられる。

エンゲルスと同時代人として1819年にフランスの写実主義の巨匠クールベがいる。彼は1871年に世界で初めて誕生した社会主義政権（パリ・コミューン）に参加した。1821年にロシアの文豪ドストエフスキー（1821-1881）、ドイツで生理学者、物理学者のヘルムホルツ（1821-1894）が生まれている。また、1822年にチェコでメンデル、フランスでレイ・パスツールが、1824年にチェコで「モルダウ」で名高いスメタナが誕生している。1823年に勝海舟が生まれ、またシーボルトが長崎に鳴滝塾を開いた。シーボルト（1796-1866）はドイツのフランケンワインの生産地ヴェルツブルクの生まれで、そこには最近（1995）シーボルト記念館ができ、シーボルトが日本の医学や博物学に果たした役割を知ることができる（実は5月に日独学術振興協会の年会がヴェルツブルクの古城マリエンベルク要塞 Festung Marienberg であり、それに参加して初めて分かった次第）。23才のドストエフスキーは処女作「貧しき人々」で中年の貧乏小役人と彼の遠戚のみなし娘との手紙を通して、“文学は絵のようなもので、つまり、一種の絵でもあり、鏡でもあるのです”と小役人マカール・ジェーヴシキンに語らせたように、当時のロシア（ペテルブルグ）の明日の暮らしにも悩まなければならない民衆をリアルに描いた。ドストエフスキーは26才頃に革命思想に接し、28才から4年間シベリア流刑に処せられた。

エンゲルスはヘルムホルツ（写真1）の誤った力の概念を「自然の弁証法（V）運動の基本諸形態」で批判的に論じている。これはエンゲルスの50代に書かれたもので、彼の格物致知（かくぶつちち）を示す一つの好例である。ヘルムホルツの“われわれは光の屈折の法則を透明な物質の屈折力として、化学的な選択親和の法

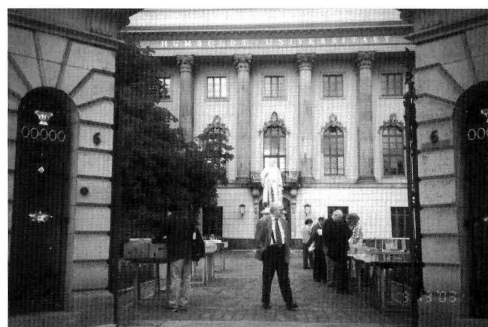


写真1. ベルリン（フンボルト）大学正面の入り口。エンゲルスはこの大学で一年志願兵の聴講生となり、哲学などを学んだ。またマルクスは1836～1841年まで法学を学んだ。1階の入り口から正面の部屋に入ると、正面の壁にマルクスの哲学に関する文章がレリーフされている。ここで観光客は何か説明を受けていた。この建物の2階廊下にR・コッホ、H. シュペーマン（発生学）、アインシュタインなど29人のノーベル賞受賞者の写真が飾られている。（筆者の居たマルブルクでも今までに化学5人、物理学1人、医学3人、文学1人の計10人が受賞している。これは今まで日本がもらった数に等しい）。正面の立像は、ケーニヒスベルク、ボン、ハイデルベルク、ベルリンの各大学教授を歴任したヘルムホルツ像。

則を種々の物質相互間の親和力として客観化する。こうしてわれわれは金属の電気的な接触力について、粘着力、毛管力、その他について、語る（通俗講演集、1869年）“に対してエンゲルスは“完全に客観的な、一つの自然法則の中へ力という純粋に主観的な観念を持ちこんでいる。・・・だから力によってわれわれの知識をではなく、法則とその作用方式との本性に関する知識の欠如を表現している”と批判した。そして、ヘルムホルツの物理的諸現象における諸力は全く同じ権利を以って中世のスコラ学者が温度の変化を一つの熱力及び一つの冷力で説明したのと同じで、それらの現象の一層突っ込んだ一切の研究を節約するものだと述べている。このように当時の一流の物理学者に見られた力の概念の混乱を指摘している。いわゆる“力”という“神の手”をもちだしても科学の進歩にはならないということで、エンゲルスならではの透徹したものの方の見方である。また、ヘルムホルツはエネルギー保存の自然科学的な証明の分け前を自分に帰そうとしているようにみえるが、マイヤーは1845年に1847年のヘルムホルツよりもずっと天才的な事を語ることを心得ていたと釘を刺している。レーニン（1870-1914）は、いろいろな言葉をもてあそんで唯物論と観念論の間をふらついている折衷主義の観念論者で、ロシアの革命



写真2. ブッパータール・バルメン駅の正面



写真4. エンゲルスハウスの前の公園。



写真3. エンゲルス通り。この道路の右側に沿って小さな川が流れている。



写真5. 公園の一角にある石碑。

運動に否定的影響を与えているマッハ主義者(経験批判論者)を粉砕した「唯物論と経験批判論」の中でヘルムホルツについて次のようにいっている。感覚を感覚器官にはたらきかける外的存在から説明する(唯物論—筆者注)とともに、物についてのわれわれの表象は記号なのであるという(記号論=観念論—筆者注)ヘルムホルツを首尾一貫していない「恥ずかしがりやの唯物論者」(エンゲルスの言葉、筆者注)と呼んで、“符号、または記号は想像上の対象にかんしてもまったく可能なものであって・・・”と論じている。この符号は前述のヘルムホルツが説いた物理学上の“～力”に通じる。唯物論の立場にしっかり立てず、物理学にうっかり～力という言葉を使用したから前述のようにエンゲルスに批判されたのである。

唯物論は、われわれの外に物質の存在を認め、感覚、表象、観念などは脳髓による外界の物質(自然)やそれらの運動の反映または模写とみなす。観念論は、逆に外界はわれわれの観念が実体化したものとする。つまり、自然が先(唯物論)か観念=精神が先か(観念論)という違いがある。どちらが科学的であるかは指摘するまでもない。エンゲルスは、このことを“思考と存在との、精神と自然との関係という哲学全体のこの最高の問題”といった。さらに、いろいろな装い(言葉の

上で)をこらした一見斬新な哲学も結局、哲学が始まって以来今日までに至る哲学上の二つのライン(観念論と唯物論)から逃れることはできないことを喝破した。このことは日々にするいろいろな理論を検証するうえで重要な指針となる。

バルメンは1920年に隣のエルバーフェルトと合併し、ブッパータール Wuppertal 市となっている。マールブルクからケルンまで列車で3時間20分、ケルンで乗り換えブッパータールまで30分、さらに乗り換え5分でブッパータール・バルメン駅に着く。ブッパータール・バルメン駅は写真2では大きくみえるが、無人駅で寂れた感じがした(帰りの切符を自動販売機で買うのにひと苦労した)。エンゲルスの生家は駅から徒歩で3～4分の所にある。しかし、そこにたどり着くまでに4～5人に尋ね時間を浪費してしまった。駅を背にして駅前通を進むとすぐにエンゲルス通り Engels Strasse (写真3)に出る。そこを左に折れて少し行くと小さな公園が左手にある。そこはエンゲルスの生家と小さな道路を介して面している(写真4)。その一角に”HIER STAND DAS GEBURTSHAUS DES GROSSEN SONES UNSERER STADT. ER IST DER MITBERGRUNDER DES WISSENSCHAFTLICHEN SOZIALISMS



写真6. エンゲルスの生家(エンゲルスハウス)。「フリードリヒ・エンゲルス伝記」に載っている写真とは3階の窓の形と傾斜、側壁に窓がついている点が違っている。伝記には“エンゲルス一家はブッパ―川の近くにあり、バルメン800番、ブルッヒャー・ロッテと称された”とある。

(ここにわが町の偉大な息子フリードリヒ・エンゲルスの生家がある。彼は科学的社会主義の協働創始者である)”と刻まれた石碑がある(写真5)。エンゲルスの生家は屋根裏も入ると4階建てになっている(写真6)。プレートから1775年に建てられたことが分かる(写真7)。現在はブッパ―タール市のエンゲルスハウス歴史博物館になっていて、入館料は2ユーロ(約280円)で、2階のみ見学できるようになっている。見学者は少ないらしく、閑散としていて“ここはエンゲルス・ハウスだということを知っているのか”というようなことを聞かれた。2階にはそんなに大きくはないが、6つ位の部屋があり、当時の地方の工場主の生活と趣味を伺い知ることができる(写真8)。また若き日のエンゲルスの手紙とそれらに添えられた絵(漫画)、ノート、自筆原稿とそれらの膨大な出版物、紙でできた等身大の若いエンゲルス像などが展示されている(写真9)。エンゲルスは少なくとも14歳で隣のエルバーフェルトのギムナジウムに入学するまでこの家で成長したことになる。当時のブッパ―タールはライン州の線維工業の中心地であった。その多感な少年時代にエンゲルスは産業革命を経た資本主義社会の勤労者の惨状と貧苦を目の当たりにして、心を痛めながら成長した。エンゲルスの「ブッパ―タールだより」(テレグラフ・フュール・ドイチュェラント、1838年3月)に見られる当時のブッパ―タールは、“・・・この両都市(エルバーフェルトとバルメン、筆者注)は行程3時間ほどかかる長さのブッパ―河の渓谷にある。狭い流れが早くなったり淀んだりしながら、緋色の川波をけたてて、煙を吐いている工場と糸でいっぱい晒し場のあいだを流れている。・・・しかし驚く程惨



写真7. エンゲルスの生家が1775年に建てられたことを示すプレート。



写真8. エンゲルス生家2階の部屋。



写真9. エンゲルス自筆のノートや原稿など。写真右側にあるようにエンゲルスは最愛の妹メリーに宛てた手紙によく漫画を添えて送った。左は24～5才頃のエンゲルス。

めな状態がブッパ―タールの下層階級、特に工場労働者のあいだに支配されていて・・・この地方全体は敬虔主義と俗物根性との海にひたされていて云々”と表現されている。

1837年11月18日にゲッティンゲン大学の7教授が、1833年9月に公布された進歩的な新憲法を1837年11月1日にハノーファー新王が破棄したことを大学当局に抗議するという事件があった。大学当局は7教授を首にした。その中にグリム兄弟のヤーコブとウィルヘル

ム、磁極の強さの単位ウェーバー(Wb)に名をとどめている物理学者のW.E. Weber(1804-1891)などがいた。新王と大学当局の暴挙に対して言語学教授のヤーコプ・グリムは「über seine Entlassung」(彼の免職について、1837年12月)という格調高い抗議、あるいは弁明書を公にした。1862年11月ゲッティンゲン大学の学生団はこの事件を偲び、77才のヤーコプ・グリムを次のようなメッセージで讀えた。「暗黒の時代に少数の人が戦って守ったものが、国民の遺産となりました。・・・青年の心を、神聖なもの、単純なもの、真実なものに向け、きたえることがあなたの高い努力でした」と。この事件について18才のエンゲルスは親友グレーバー兄弟に“僕は最近ヤーコプ・グリムの弁明書を買った。それは非常に立派なもので、稀に見る力がこもっている”と手紙を書いている(プレーメン、1838年9月1日)。事件後30年目のゲッティンゲン大学の学生の気持ちは事件当時の青年エンゲルスの心情でもあったと思われる。グリム兄弟は一時カッセルに亡命し、彼らの学んだマールブルク大学に就職を望んだがヘッセン政府に拒否された。しかし、この不遇が兄弟をして歴史的な“ドイツ語辞典”編集を手がけるきっかけとなった。A.ジード、H. ヘッセ、B.プレヒトなどの書棚を飾ったこの辞典の編集は戦後の東西分割時も双方で継続され、1961年に実に123年かかって完成されたという。

エンゲルスは1837年に商人としての修行のため高校を中途退学して、1841年3月までの2年8ヶ月をプレーメンの商会で働いた。その頃、いつか詩人になることを夢見たエンゲルスはゲーテ(1749-1832)の「若き詩人のために」(1831)を読み、自分の詩才に絶望したが、詩作はゲーテのいうように気持ちの良い気晴らしになるから続けると友人に書いている。実際、妹マリーや友人の手紙によく自作の詩を添えている。また妹マリーへの手紙で、乗馬で遠乗りに出かけたこと(筆者が居住したマールブルクのゲストハウスの裏山は鬱蒼とした森林でおおわれ、よく散歩した。その時、かなり広い範囲で木が切り払われ草でおおわれた場所にでた。不思議に思ったところ、最初のノーベル医学生理学賞を受賞したベーリングの大きな霊廟だった。その近くの人っ子一人いない小道で馬に乗った人に出会った。またベルリンでは広大な動物公園 Tier Garten で馬に乗っている警官を見た。馬の競技会(馬術)がテレビでよく放映された。エンゲルスの時代だけでなく、現在のドイツ人も乗馬を愛好しているようだ。自然を大切にするドイツ人の一面が感じられる)、

や俗物根性をあざ笑うために口ひげを生やした者だけで口ひげの宴会をやったとか、ビールやワインをたらふく飲んだこと、フェンシングを習って決闘をしたことなどをユーモアたっぷりに知らせている。その当時のドイツの多くの若者と同じく、いつも陽気で快活なアルト・ハイデルベルクな青春時代を過ごしたことが分かる。一方で、親友グレーバーに“そのほか僕はヘーゲルの歴史哲学を勉強しているが、これは壮大な著作だ。僕は毎晩、義務としてこれを読んでいる。巨大な思想がおそろしいくらいに僕を感動させる”と手紙(1839年12月21日)で知らせるほど猛勉をしている。また、マンハイムの“お上品な学院”(エンゲルス)で寄宿舎生活をしている妹マリーに次のような手紙を送っている。“愛するマリー！・・・・・・・・・・母さんはクリスマスにゲーテ全集を買うための小切手を送ってくれた。僕はきのうすぐ最初に刊行された諸刊をとりよせ、昨晚12時過ぎまですっかり楽しみながら「親和力」を読んだ。傑物だな、ゲーテという人は！もしおまえがこの人のようにドイツ語を書くならば、おまえに外国語なんかみんな免除させてやってもよいくらいだ。・・・

おまえのフリードリヒ
プレーメン、40年12月28日”

エンゲルスは13才の時、小さい頃に聞いたギリシャ伝説について感謝をこめた詩を祖父に送っている。このように、エンゲルスは幼い頃からギリシャ神話に親しみ、また若い頃にシェークスピア、セルバンテス、ゲーテをはじめ内外のすぐれた文学に親しんでいる。本喰い虫と自称したマルクスはいうに及ばず、レーニンもトルストイ(1828-1910)の小説をロシアの社会を写す鏡と表現したように、文学から多くを吸収している。またエンゲルスはベートーヴェンのシンフォニー[第5](運命)、シンフォニア・エロイカ[第3](皇帝)は大好きな曲で、明日それを聴くことができるんだとその喜びを妹に伝える(マリーへの手紙、1841年3月8日)とともに、リストのピアノ演奏でベルリンの婦人がたがすっかりのほせあがった様子を面白おかしく知らせている(マリーへの手紙、1842年4月16日)。レーニンも激務の中、名画をゆっくり味わうことができる時間があつたらと洩らしたように、文学や芸術が彼らの人間性を広く、深く育くんだことが分かる。してみると、ただ単にまる暗記の主義主張に凝り固まった活動家(いわゆる民主的といわれる活動分野の人士にもままみられる)や専門家では、いつきそれらに情熱的であってもその根底をなすものがないから、いず

れすれっからしになるのが落ちであることが理解される。1870年代初頭に執筆されたドストエフスキーの「悪霊(あくりょう)」にこのすれっからしの最悪の例が描写されている。これは当時のロシアで実際あった、政治的な詐欺師であるネチャーエフが大学生イワノフを架空の秘密組織を密告したと勝手にでっちあげて殺害した事件(ネチャーエフ事件)を題材にしている。小説の中では、ネチャーエフはピョートル、イワノフはシャートフとして登場する。このえせ赤色リベラリズムの集団(社会民主同盟)は、“諸君のなすべきことは、いっさいの破壊、一国家とその道徳の破壊にほかならない”(「悪霊」)と云ってはばからない無政府主義的な単なる暴力的な破壊集団にすぎない。なにもかも秘密なこの組織の実態が、1871年にサンクトーペルブルク新聞に載った「ネチャーエフ事件の裁判記録」などを基にしたマルクスとエンゲルスの共同執筆によるパンフレット“社会民主同盟と国際労働者協会”(1873年)の中で暴露されている。それによると、世界の労働運動に混乱を与え、各国政府に無上の奉仕をするためにインターナショナル(世界労働者協会)内に自分の結社を植え付け、主導権を奪うのが目的だった。また、“最も極端な無政府主義の仮面のもとに現実の政府ではなく、自分の正統性と指導を受け入れない革命家たちに打撃をくわえようとしている結社である”とか“目的を達成するためには、どんな手段も、どんな不誠実も辞さない。嘘、中傷、脅迫、闇討ち、なんでもかまいはしない”という非革命的、非人間的な結社であると告発した。イワノフは農民の子供の教育に情熱を注ぎ、そのために自分は暖かい食事をとることもまれだったという。そういう人間であるからイワノフはネチャーエフとバクーニンの手によるテロリスト的な宣言文のあまりのばかばかしさに驚き、この結社から身をひこうとしたこともこのパンフレットに書かれている。ネチャーエフの「革命教理問答」にある革命家の社会にたいする義務として“この世界に属する人間の破壊をためらってはならない。血縁、友情、恋愛の絆をこの世界にもつのはきわめて遺憾なことである”とか“考慮せねばならないのは、ある人間を殺すことが革命の事業にどれだけの利益をもたらすかということである”とあり、これはもう“殺人教理問答”といってい。パンフレットはこうした陰謀とたたかう方法は陰謀を全面的に暴露するしかないことを公然と明らかにした。当時のロシアの青年達は、自治的なグループの自由な連合、反権威主義、無政府などという美辞麗句、秘密結社の大きさと勢力のでたらめな宣

伝や革命がま近いとい予言(革命的な作り話)などに惑わされてこうした結社にひきずられた。バクーニン(1814-1874)はロシアの無政府主義者で、いわゆる秘密組織の首領である。彼がいかにペテン師かということもパンフレットの付録に記されている。「悪霊」ではバクーニンはニコライという資産家の寡婦の一人息子で、虚無的、冷酷無比で分裂気味な青年として描かれている。この小説は反革命的ということで批判にさらされてきたが、気の弱いリベラリストのステパン氏に息子のピョートルらの秘密組織について“おまえらはまず真っ先にギロチンをかつぎ出してきて有頂天になっているが、それは頭をはねるのがいちばん簡単で、思想をもつのは何より困難だというそれだけの理由からじゃないか！オマエハ・ナマケモノダ！オマエラノ・ハタジルシハーボロキレダ、ムリヨクダ”と語らせていることから、ドストエフスキーはこの秘密組織の本質をよくとらえていて、社会変革とは似ても似つかない組織の実態を一般に知らしめ、警告しているとするなら充分評価できる。実際、“バクーニンの学問ぎらいは昨日や今日に始まったものではない。シベリアではこれは周知の事実なのである”と上記のパンフレットにある。日本でもネチャーエフ事件からちょうど100年経った1970年前後に、若者の革新的な気分をそそるような「反帝」(反帝国主義)、とか「反スタ」(反スターリン主義)とかの勇ましいスローガンをかかげた無政府主義的な組織や分派(セクト)が大学の内外にたくさん出沒した。最終的にセクト間あるいはセクト内でネチャーエフ事件を思わせるようなおぞましいリンチ(私刑)殺人事件をひきおこした。こうしたことが反社会的な事件として国民的な指弾を受けたのは当然といえる。

エンゲルスはバルメンに戻ってからの1841年5月半ばに失恋による傷心を抱え馬車や徒歩でアルプスを越えイタリアを旅した。その時の紀行文「ロンバルディア跋涉(ばっしょう)」の中で、“あらゆる個人的苦悩のなかで最も高く尊いもの、つまり、恋の苦悩以上に、美しい自然に向かって思いを述べる権利のある、どんな傷心があるだろうか”と痛手の深さを語るとともに、“目で見える予定の絶景を心のなかで眺めながら、私は幸福感に満ちてまどろみに落ちていった”と自然の美しさを讃えた。アルプスの自然は若きエンゲルスにとっても傷心を癒すのに充分過ぎるほど美しかった。

大学で法学を学びたかったエンゲルスは、1841年9月に一年間の兵役のためベルリンに行き、余暇を利用してベルリン大学の聴講生になった。その頃、「一聴

講者の日記「マルハイネケ」で、“どんな大学も、ベルリン大学ほどよく時代の思想運動の中に身を置き、もろもろの闘争の闘技場となったところはないということは、この大学の名誉である。どんなに多くの他の大学が、・・・、これらの闘争から身を引き、従来からドイツの学問の悲運となっていたかの学識ある無感情のうちに沈みこんでしまったことか”と嘆き、だけどベルリンは諸流派の代表者たちがいて活発な論争が行われていて、現代の諸傾向の概観を学生に提供しているから聴講権を行使したと言っている。この日記は、マルハイネケという神学教授が当時の反動哲学者のシュリング(1775-1854)を批判する第1回目の講義について書いたもので「ライン新聞」(1842年5月10日)に掲載された。エンゲルスは、自然、歴史、精神の全世界が不断の運動、変化、変形、発展のなかにあるという弁証法的なものの見方を完成させたことがヘーゲル(1770-1831)の偉大な功績と指摘した(「空想から科学へ」)。また、“世界は絶対理念(神)の実現である”と説くヘーゲルを、“ヘーゲルの弁証法は頭で立っている”と批評した。ヘーゲルの偉大さを見抜けずうかつに批判したシュリングをマルハイネケは“巨人とたたかった一寸法師に、また風車と格闘したあのいっそう有名な騎士(ドン・キホーテ、筆者注)に類するものであることは、言うまでもない”と学生に語り嵐のような喝采を浴びたとエンゲルスは記している。この日記の前に既に若いエンゲルスは「シュリングのヘーゲル論」、「シュリングと啓示」、「シュリング、キリストのうちに哲学。あるいは世界知の神知への変容」などでシュリング批判を展開した。

シュリングについて、レーニンは“このシュリングという人物は、うぬぼれて、すべての従来の哲学流派をつつみこみ、これをのりこえていこうとする、中味のないホラ吹きだ”というマルクスの手紙を「唯物論と経験批判論」に引用している。

ヘーゲルの弁証法哲学は“生成と消滅との不断の過程、低いものから高いものへの無限の上昇の不断の過程以外には、なにも存在しない”(「フォイエルバッハ論」エンゲルス)というもので、自然とともに社会も固定した永久不変なものという見方が一般的な当時では革命的だった。しかしヘーゲルの下半身は観念論だった。そこを批判したのがフォイエルバッハ(1804-1872)で、“自然はすべての哲学とは独立に存在している。神はわれわれ自身の本質が空想のうちに反映されたものにすぎない”と唯物論を擁護した。これについてエンゲルスは“フォイエルバッハの「キリ

スト教の本質」の解放的な作用は、みずから体験した人でなければ、思い浮かべることができない。一人のこらず感激した”(「フォイエルバッハ論」)とその影響の深さを述べている。フォイエルバッハもエンゲルスから下半身は唯物論で、上半身は観念論と指摘されたように弱点を持っていた。ヘーゲルの哲学の革命的な面とフォイエルバッハの唯物論から、20代後半にエンゲルスとマルクスは弁証法的唯物論の立場に達した。だから“マルクスと私とは、ドイツの観念論哲学から、そこで意識的にもちいられている弁証法を救いだして、唯物論的な自然観と歴史観をとりいれた唯一の人間だった”と「反デュウリング論」で述べた。エンゲルスは弁証法の試金石としての自然科学の最新の成果を絶えず注視し、研究していた。その成果が「自然の弁証法」である。弁証法的な思考方法について、意識や思考は最初からすでに人間に与えられたものではなく、人間の脳の働きの所産も、結局自然の産物なのだから、自然の連関と矛盾するものではなく、むしろ照応するものだ、と述べている(「反デュウリング論」)。レーニンは、20世紀初頭の物理学者が、従来のニュートン物理学では説明のつかない陽子や電子など素粒子の挙動に直面した時に、物質は消滅したとか、物質を知ることにはできないという不可知論に陥った混乱について弁証法を知らなかったからだともまったく正しく指摘することができた(「唯物論と経験批判論」)。

1842年に(22才)父の経営するイギリスの線維工業の中心地マンチェスターの綿紡績工場(エルメンとエンゲルス商会)で事務をとりながら、自らの足と目で当時最も進んでいたイギリス資本主義社会の労働者の状態をつぶさに観察した。そうした資本主義社会の経済構造を研究した成果を「国民経済学批判大綱」として、「独仏年報」(1844)に載せた。科学的社会主義のもう一人の創始者カール・マルクス(1818-1883)はエンゲルスのこの論文を読み、ブルジョワ経済学の徹底的な研究を始めたといわれている。翌年、イギリスの労働者の非人間的な社会状態と精神状態を告発した「イギリスの労働者階級の状態」を出版した。

マルクスは「国民経済学批判大綱」を“経済学のカテゴリー批判のための天才的な小論”と評した。エンゲルスはそこで次のように述べている。“商人の相互の蔑視と貪欲から生まれた国民経済学すなわち至富学は、醜悪きわまる利己心の刻印を額につけている。・・・だが経済学者(古典派経済学者)は、その観察が粗雑なために、手をつかめる現金で自分に支払われるもの以外の等価物のあることを知らない”。この

最後の文は剰余価値の存在を予見するようにもとれる。最後に“私は、やがて機会を得て、この制度のいとうべき不道德性を詳しく叙述し、ここできらびやかにあらわれている経済学者の偽善を容赦なく暴露したいと思っている”と結び、「イギリスの労働者階級の状態」の執筆でその約束を果たした。この24才のエンゲルスの言葉を団塊の世代をイナゴ世代と言ってはばからない、破廉恥な(自身が国を食い荒らしているイナゴだということに気付いていないという意味で)御用経済学者の竹中某にとくと味わってもらいたいものだ。もっとも味わうことのできるまともなハートがあればの話だが、きっと屹度(きつと)馬鹿とはこういう御仁のために天から与えられた言葉なのであろう。したがって、当分死語になることはなさそうだ。エンゲルスは「イギリスにおける労働者階級の状態」の序文で“私は中間階級(資本家階級)の会合や宴会、ポートワインやシャンパンを断念して、私の自由な時間をほとんどすべて普通の労働者との交際についやした。私はこのようにふるまったことを、喜びとしかつ誇りとするものである”と2年間のイギリスでの生活を抑圧され、中傷されている人々に捧げた。

マンチェスターの一主婦エリザベス・ギヤスケル(1810-1865)はその当時の貧しい労働者の状態を長編小説「メアリー・バートン(マンチェスター物語)」に叙述した。彼女はその序文で“私は経済学も、商売のことも何も知らない。私はただ、ありのままに書こうと努めてきた。この物語が、何らかの制度に一致したとしても、また相反したとしても、いずれの場合も意図的なものではない”と述べながら、“彼ら(火事で工場が焼け、失職した労働者のこと。筆者注)は飢えた小さな子供をなだめるため、オートミールやじゃがいもだったら僅かしか買えない数ペニーで、阿片を買い、重く危険な眠りの中に辛さを忘れさせようとした。それは母親の慈悲だった”とその悲惨さを描写した。現今の日本は商品が溢(あふ)れ、生活は便利になり豊かなように見える。しかし、全国的にホームレスは増加し、ついに自殺者は年間3万4千人を超えた。その大半は倒産や失業などの経済的な理由によるという。また、命を削る程の長時間労働で働き盛りの過労死は絶えず、いまや Karoshi は不名誉な国際用語になっている。自然と農業の目をおおいたくなる程の破壊、高い保険料と老後の低い年金生活。これで本当に日本は豊かになったと言えるのだろうか？さて、1844年にエンゲルスがイギリスからドイツへの帰途、パリに亡命中のマルクスに会ったことが世界を揺るがす思想が誕



図2. 1849年5月11日、エルバーフェルトとバルメンの境のハスベラー橋でバリケードの構築を指導するエンゲルス(参考書2より借用)。この頃、エンゲルスはヨーロッパ各国に勃発した市民革命と反革命の本質を軍事的、史的唯物論の立場から新ライン新聞にたくさんの論評を載せた。

生する歴史的な契機となった。1845年にエンゲルスはマンチェスターの労働者街を案内してくれた糸巻き工のアイランド娘、メアリ・バーンズと結婚した。1849年にバルメンの隣町エルバーフェルトで、新興ブルジョアジーに操られてはいたが、労働者と市民、義勇兵を主力とした王政打倒の市民革命(ブルジョア革命)をつぶすためのプロイセン軍による反革命的軍事行動が起こった。エンゲルスはエルバーフェルトで労働者と市民の側に立ってバリケードの構築や砲兵隊を指揮した(図2)。この時に後年マルクスの娘たちに將軍と綽名(あだな)されるほど該博な軍事知識を役立て、労働者、市民から絶大な信頼を得た。一方でこの出来事は父の逆鱗(げきりん)に触れることになった。

1850年から1870年までの20年間エンゲルスは、マンチェスターで昼は商人として、夜は自由人として郊外の家で過ごすという二重生活、つまり昼はブルジョワ、夜はそれに敵対する革命家として必要な知識(その当時の最先端の自然科学も含む。エンゲルスは創刊間もない科学雑誌ネイチャーにも目を通していた)を吸収する学究的な生活を送った。

その当時の自然科学の最先端の学説としてダーウィン(1809-1882)の進化論がある。エンゲルスはダーウィンの生存闘争について、“自然淘汰または最適者生存において全く縁のない二つの事柄を混同しているのは彼(ダーウィン)の誤りである”(「自然の弁証法」)と言っている。二つの事柄というのは自然淘汰(最適者の生存)と生存闘争を混同していることで、生存闘争は動、植物の過剰棲息による諸闘争に厳密に限定すべきであることを指摘した。こうした生存闘争(マルサス主義)を人間の社会に適用したのが社会ダーウィ

ニズムといわれる弱肉強食の論理で(今のアメリカや日本の社会)、エンゲルスはこうしたことを警戒して特に生存闘争について批判したと思われる。さらに自然淘汰と淘汰された生物が集団内でどのように増加していくかを明らかにすること(今日でいう集団遺伝学)で進化を説明できることを予測した。さらにエンゲルスはダーウィンが種の変異をひきおこすところの梃子(てこ)をそれ以外(自然淘汰、筆者注)にはないものと考え、個体的な変異が一般化してゆく形式にばかり気をとられていたために、繰り返しあらわれるそうした変異の原因をゆるがせにしたことは一つの誤りである。しかし、こうしたことは、ダーウィンにかぎらず、進歩をもたらす人に共通に見られるものだと指摘するとともに、“この変化と差異とがそもそもどこから生じてくるのかということ”を研究するきっかけを与えた人はだれかといえ、これまたダーウィンにはほかならない”と、性急にダーウィン説の弱点をいうだけでなく、その時代の枠の中で到達することのできた相対的真理について述べている(「自然の弁証法」)。実際、メンデルが遺伝の法則を発表したのは1865年で、それが再発見されたのはさらに40年後である。さらに、ワトソンとクリックによる遺伝子の本体DNAの分子モデルの発見が約90年後の1953年になる(ワトソンと共にDNAの二重らせん構造の発見で1962年にノーベル賞を受賞したクリックは今年の8月に88才の生涯を閉じた)DNA塩基の変異によるアミノ酸の変化についてはよく分かっているが、そのことが長い時間軸での進化に及ぼす関連についてはほとんど分かっていない(各生物種の間でのDNA塩基配列の違いが分かっただけでは進化は解明されたとはいえない)。少なくとも次ぎの2点が解明されると進化についてもっと具体的に語ることができるかもしれない。(1)同じ種内での個体間の形質上の違いがDNAにどのような違いとして刻印されているのか。(2)ある環境に対する適応的な形質の発現は、どのようにして生殖細胞のDNAに記憶され、伝えられていくのか。つまりDNAと環境との相互作用のメカニズムの解明といえる。環境に対する適応的な形質発現ということは、初めて体系的な進化論を提唱したラマルク(1744-1829)の獲得形質、ダーウィンの自然淘汰のどちらにも適用できると思う。ただし、気の遠くなるような時間を含む。前者は生物の中にある内在的な力、後者は環境による外発的な力を前提している。そして両者とも歴史的な制約で形質が子孫に伝えられるメカニズムについては知らなかった。ラマルクは“獲得形質が遺伝すると”誤って主張

したとよく言われるが、獲得した適応的な形質と表現したらダーウィンの説とたいして変わらない。進化論を提唱する時期が少し早かったことと、当時“生物学の独裁者”といわれ、天変地異説(大洪水のような一大事件で滅びたのが化石になり、生き残ったのが現在の生き物)と種の不変を信じていたキュヴィエ(1769-1832)が論敵だったことがラマルクの進化論に否定的に作用したと思われる。

話をもどすと、この商人生活には20ヶ国語(日本語の新聞も読んでいた!)をどもるといわれた語学の天才が役に立ったようだ。自ら選択した仕事だったが、“時間の浪費で僕をまったく意気沮喪(そそう)させてしまうこの犬の商売から解放されること以外に、何も望まない”とこの商人生活を嘆いている(マルクスへの手紙)。だが、息子の生き方を心配し、激怒することもあった父がマンチェスターに来た時にその繁盛ぶりにすこぶる満足した程の経営の才も示した。その時の様子をマルクスに“明日か明後日おやじは帰途につく、彼の商売には非常に満足して、手当ての増額にはうまく成功した。・・・”と書いている(1852年5月19日)。商人生活から足を洗うことができた時にエンゲルスは母エリーザベトに“お母様、きょうは私が解放された最初の日で、この日を有効に使うには、お母様にお便りする以上のことはありません。・・・、私は新たに自由の身になって、すっかりご機嫌です。きのうからまったく人が変わったようで、10才若返りました。陰気な街に行く代わりに、けさは天気もすばらしかったので、2,3時間畦道を歩いてきました”(1869年7月1日)とその喜びを伝えている。エンゲルスは愛妻メアリの突然の死(1863年)に際し、“メアリは死んだ。・・・まったく突然のことで、心臓病が卒中かだ。・・・僕がどんな気持ちでいるか、なんとも言うことができない。あのかわいそうな娘は心底から僕を愛していたのだ”と極めて短い、とまどった手紙をマルクスに書いた(1863年1月7日)。この手紙に対するマルクスの返事は、主として家庭の窮乏を訴え、お金を無心する内容でエンゲルスに失望を与えた。だが、次の手紙でマルクスは“君にあの手紙を書いたのは、僕の大変なまちがいだった。僕はあの手紙を出してから、すぐにそれを後悔した”(1863年1月24日)とその非礼を率直に詫び、その理由を明らかに述べている。すぐにエンゲルスはマルクスに宛てて、“君の率直さを感謝する。・・・、僕は彼女の死とともに僕の青春の最後の一片が葬られたのを感じた。・・・あえて言うが、あの手紙(マルクスの手紙、筆者注)は一週

問僕の脳裏にあって、僕はそれを忘れることができなかった。気にかけることはない。君のこの前の手紙はあの手紙を帳消しにした。僕は、メアリと同時にいちばん古いいちばん良い友を失わずにすんだ、ということを楽しく思う”と書き送っている(1863年1月26日)。最初で最後の亀裂を両友はその率直さで克服した。エンゲルスはマルクスの死後、人類史上不朽の書「資本論」第2、3巻をそれぞれ1885年と1894年に刊行した(第1巻はマルクスの手により1867年に出版された)。マルクスの膨大な遺稿を整理して纏(まとめ)上げるのは「資本論」の歴史的意義とその内容を理解できるエンゲルスしかなしえなかった。

エンゲルスはその著「空想から科学へ」の末尾で“この二大発見、すなわち唯物史観と、剰余価値による資本主義的生産の秘密の暴露とは、われわれがマルクスに負うところである。社会主義はこの発見によって一つの科学となった”と極めて簡潔にこの著書の科学の意味を表現した。“空想”というのは、18世紀にサン・シモン(1760-1825)、チャールズ・フーリエ(1772-1837)、ロバート・オーエン(1771-1858)らによって提唱されたもので、博愛、正義、理念、理想を唱えることによって社会主義は実現するという思想をさす。つまり、頭で考えたこと(空想)で社会の弊害を取り除くことができ、社会正義が実現するというもの。この思想は当時の未発達な資本主義制度に対応したもので、天才的だが(エンゲルス)、実現不可能なものだった。エンゲルスは「反デュウリング論」でサン・シモンを天才的な眼光の広さがあり、後代の社会主義者のほとんどあらゆる思想が萌芽として含まれている、と称した。“文明においては貧困が過剰そのものから生じる”と現存の社会状態にたいする透徹した批判をしたフーリエを、同時代のヘーゲルと同じ見事さで弁証法を使いこしている人と指摘した。オーエンについては、スコットランドのニューラナークで大紡績工場の墮落した労働者を、彼の発案した幼稚園で育成し模範的な労働者にしたように、名声と富をかえりみないで実践的に共産主義を前進させた人(アメリカで全財産を投じて共産主義コロニーを作り、それで破産した)と称した。イギリスで労働者のために行われたあらゆる社会運動はオーエンの名と結びついている(協同組合の設立や労働時間短縮の法案など)と述べている。

エンゲルスはブルジョワの御曹司(おんぞうし)として、また豊かな才能を活かして(この活かすは、もちろんエンゲルスの嫌った俗物的な意味であることはいうまでもない)何不自由なく暮らせた生活を投げ打っ

て貧しい人達の解放のために理論的、実践的な生涯を捧げた。また一文にもならない「資本論」執筆で極貧のマルクス一家を20年もの好きでない商人生活をマンチェスターで続けながら経済的な援助を惜しなかった。そうでありながら、“自分は科学的社会主義創始の事業では第二バイオリンを弾いただけ”と並外れた謙虚さで語ることができた。ちょっとした事柄で嘘を積み重ねてまで自分の手柄話にしたがう一部の日本の政治家に聞かせたい話である。64才のエンゲルスはヨハン・フィリップ・ベッカーに宛てた手紙(1884年10月15日)に次のようにしたためている。“僕は、一生涯、自分に向いたことをやってきました。つまり、第二バイオリンを弾くということで、この点では自分の役割をかなりうまくやってきたつもりです。そして、マルクスのようなすばらしい第一バイオリンをもっていることを、僕は喜んでいました”と。エンゲルスは遺言書の中で、遺言執行人3人にそれぞれ250ポンド、ドイツ帝国議会に労働者を代表する議員を送りだす金(選挙資金)として1000ポンド、姪のメアリ・エリン・ロッシャーに3000ポンドを遺贈し、残金を8つに分けその3部分をマルクスの二女ラウラ・ラファルグに、他の3部分をマルクスの末娘エリナ・マルクス・エーヴェリングに、残る2部分をルイーゼ・カウツキーに遺贈(無償贈与)するとした(1893年7月1日)。このように最後までマルクス一家を気づかっていた。

上述したように、エンゲルスはマルクスにブルジョワ経済学の研究に目を向けさせ、それに専念させたということ、マルクス一家を経済的に援助したということ、さらに資本論第2、第3巻を刊行したということで科学的社会主義の創始は協働の事業だと言われる。つまり、どちらが欠けても科学的社会主義は日の目を見ることがなかった。だからエンゲルスを語る時にはマルクスを、マルクスを語る時にはエンゲルスを語らざるをえないのである。

昨年(2003年)のドイツの第二テレビ(ZDF)が330万人に実施したドイツの偉人コンクールのアンケートで、マルクスは3位に入っている。1位はアデナウアー元首相、2位ルター、4位は「白バラ」のシュール兄弟、6位バッハ、7位ゲーテ、10位アインシュタイン。ハンス・シュールとゾフィー・シュールの兄妹は第二次世界大戦中、ミュンヘン大学の学生で反ナチ抵抗運動を組織し、「白バラ」というビラ通信を発行した。二人はゲシュタポ(秘密警察)に逮捕され、1943年に処刑された。戦後のドイツは現在に至るまでナチス(ヒトラーによる独裁政権、ユダヤ人などの大量虐殺を行った。

アウシュビッツ強制収容所から奇跡的に生還した心理学者フランクの「夜と霧」や映画「シンドラーのリスト」などでその実態を知ることができる)の戦争犯罪を国家的犯罪として、被害各国、民族に謝罪、補償を行うとともにナチ戦犯の追及を現在でも行っている。今年(2004年)もシュレーダー首相はポーランドでシンティ・ロマ(ジプシー)に対するナチの犯罪を謝罪した。さらに、今年新たに強制労働による犠牲者13万人にドイツ政府とナチスに担した企業は440億円を支払った。また筆者の滞在した間でも何度かナチに関する記録がテレビで放映された。戦後、A級戦犯が首相になり、歴代の自民政権は戦争被害を与えたアジア各国に謝罪することなく、A級戦犯を合祀する靖国神社に参拝するたびに各国の輿論(ひんしゅく)をかっている日本とは光と闇の差というべきだろう。

また数年前にイギリスBBC放送が実施した“この100年間で世界に最も影響を与えた人物”ではマルクスが1位だった。マルクスの威光の影に隠されてエンゲルスの名は表面に現れないが、マルクスという太陽に照らされてエンゲルスがあるのではなく、二人の独立した巨人であるという認識が自然で公平な判断である。

エンゲルスは1895年8月5日にその輝かしい生涯を終えた。(翌年、1896年に第1回近代オリンピックがアテネで開催された。今年、104年ぶりに第28回アテネオリンピック大会が行われ、日本勢が活躍したことは記憶に新しい)。その追悼文でカール・カウツキーは“エンゲルスの死によって科学と、プロレタリアートの国際的運動とが、どんなにとりかえしのつかない損失をこうむったことか”と書いた。また、リーブクネヒトは「フリードリヒ・エンゲルスの葬式」(1895年8月15日)で“ハンブルク市、ブレーメン市、ドレスデン市、フランクフルト市、ケルン市の花輪は壮観で、高尚な趣味を示すものであった。世界のあらゆる地方から到着した電報や手紙は数えきれないくらいだった。イギリスの裁判官で「資本論」の英訳者のサミュエル・ムーワ博士が、涙ながらに亡き友に別れを告げた後に、エンゲルスの甥のシュレヒテンダール、敬虔(けいけん)な、きわめて保守的なエンゲルス家の代表がその後をうけた。私は故人の見解に賛成するものではないが、フリードリヒ・エンゲルスの数々の美德、両親にたいする彼の消すことのできない愛、助けなき者、困窮せる者のための彼の苦闘を評価し得るものである。少年のころすでに、フリードリヒ・エンゲルスはそのもてる金を貧しき者にほどこすのを常とした。すべての抑圧された者、苦しめる者にくみする感情は

激しいものであった”とその模様を書き残している。

修士論文の表紙裏に“大麦の1粒が、それにとって正常な条件にであって、好都合な地面に落ちれば、麦粒はそのものとしては消滅し、否定され、そのかわりにその麦粒から発生した植物が、麦粒の否定があらわれる。だが、この植物は成長し、花を開き、受精し、そして最後にふたたび大麦粒を生じる。この否定の否定の結果としてわれわれはふたたび最初の大麦粒をうるのであるが、それは1個ではなくて、10倍、20倍、30倍の数のものである”という弁証法の平易な例文を「反デュウリング論」から引用してから30数年も経ってしまった。くしくも、この夏、北アルプスの槍ヶ岳(3180M)に同じ年月を経て再び登ることができた。今回、エンゲルスの著書をいくつか読み直してみて、それらに述べられているエッセンスはいささかも色あせていないことを実感するとともに、アルビニストがいかにも陰しくても憧れの山々に魅せられるような、そんな思いに駆られた。

最後に、この混迷を深める世界のどこかでたくさんのエンゲルスが成長していることを願わずにはられない。

参考書

1. マルクス・エンゲルス全集 1, 6, 18, 28, 30, 32, 36, 39, 41, (H・ゲムコー責任編集, 大内兵衛, 細川嘉六監訳), 大月書店, 各1973年, 1974年, 1974年, 1975年, 1975年, 1975年, 1975年, 1975年, 1974年
2. フリードリヒ・エンゲルス(若き日の思想と行動), 土屋保男, 新日本出版社, 1995年
3. フリードリヒ・エンゲルス伝記(上巻), 土屋保男, 松本洋子訳, 大月書店, 1974年
4. グリム兄弟, 高橋健二, 新潮文庫, 2000年
5. 空想から科学へ, エンゲルス(大内兵衛訳), 岩波文庫, 1999年(第77刷)
6. 自然の弁証法(上, 下巻), エンゲルス(田辺振太郎訳), 岩波文庫, 1970年(第15刷)
7. 日本歴史(上), 加藤文三他, 新日本新書, 1980年(第3刷)
8. ナチスの国の過去と現在, 望田幸男, 新日本出版社, 2004年
9. 貧しき人々, ドストエフスキー(木村浩訳), 新潮

- 文庫，1984年(第27刷)
10. 悪霊(上下)，ドストエフスキー(江川卓訳)，新潮文庫，1986年(第21刷)
11. おヨネとコハル，ヴェンセスラウ・デ・モラエス(岡村多希子訳)，溪流社，1989
12. メアリー・バートン(マンチェスター物語)，エリザベス・ギヤスケル(1848年出版，相川暁子他約)，近代文芸社，1999年
13. モールと将軍，ドイツ社会主義統一党中央委員会付属マルクス＝レーニン研究所編(栗原佑訳)，大月書店，1976年
14. 夜と霧(ドイツ強制収容所の体験記録)，V. E. フランクル(栗原佑訳)，みすず書房，1981年(第19刷)
15. 唯物論と経験批判論(上下)，レーニン(森宏一訳)，新日本文庫，1979年
16. フォイエルバッハ論(ルートヴィヒ・フォイエルバッハとドイツ古典哲学の終結)，エンゲルス(松村一人訳)，岩波文庫，1979年
17. 反デュウリング論(上下巻)，エンゲルス(栗田賢三訳)，岩波文庫，1970年(第18刷)
18. レーニンと文学，山村房次，新日本新書，1980年
19. ヨーロッパ医科学史散歩，石田純郎，考古堂，1996年